

6月28日、第78代の首相を務めた宮沢喜一氏が亡くなった。訃報に接し、日本のマス・メディアがどのような報道をするのか私は気になっていった。米国では昨年末に第38代ジェラルド・フォード大統領が、約3年前には第40代ロナルド・レーガン大統領が亡くなって

週刊

コニヤム

おり、その記憶が新しくなったからである。そして、大統領の語った言葉は映像とともに紹介され、その時代を思い起こさせるような報道がなされた。

6月28日当日、速報のテロップが流れ、夕方のニュースで短く訃報が紹介され

た。NHKでは2日後に中曾根康弘元首相らをスタジオに招いて制作した「宮沢元総理大臣を語る・戦後政治とともに」を放送したが、夜10時から午前0時までの民放の報道番組で宮沢氏を扱ったニュースの時間は2分から10分であった。宮沢政権が日本の歴史に残した業績ではなく、政局の側面から宮沢時代を語る報道が目立った。

政界を引退した後も、宮沢氏は病をおしてメッセージを発信し続けてきた。その言葉からは首相の政治信条を知ることができた。宮沢氏は歴史観欠く政治を憂慮されていたが、宮沢政権は今後歴史的にどのような解説されるのだろうか。

平成3年の宮沢内閣発足の所信表明演説で、「真に先進国家と誇れるような活

指導者たちの言葉



東京純心女子大講師
早稲田大客員講師
牧島可憐

力と潤いに満ちたずっしりと手応えのある『生活大国』づくりを進めていきたい」と述べている。16年前の日本の状況をも思いたされる言葉である。しかし残念なことに、今回の報道では宮沢政権が目指していた「生活大国づくり」がどのように国民に受け止められたのか、十分な解説は見当たらなかった。「知性派」「国際派」「合理主義者」といった分類で表現するのはなく、日本の首相が何を考えて国民をリードし国家を動かしていたのか、公の場で発せられた発言や演説から歴史を分析する手法があってもよいだろう。

宮沢政権を実際に見るとのなかった世代は、宮沢氏の残された言葉からその時代を検証することになる。ジャーナリストが紹介するエピソードからその人物のパーソナリティを垣間見たり、政権の側近といわれる人たちから当時の政局の動きを聞いたりすることはできる。

しかし、国会での演説に、国家の指導者が国民に何を語ろうとしたのか、その意図は何であったのかが示されている。政治リーダーの言葉によって、その時代を知ることにもなるはずだ。

政治家の演説の重要性と、またそれを読み説く力が求められる中、マス・メディアも歴史認識の上に立って指導者たちの言葉を受け止める必要があるのではないだろうか。